

XI 付 録

- 1 京都大学学歌
- 2 学生歌
- 3 応援歌
- 4 逍遙の歌

1 京都大学学歌（昭和15年1月18日制定）

(1) 九重に 花ぞ匂へる
千年の 京に在りて
その土を 朝踏みしめ
その空を 夕揚げば
青雲は 極みはるかに
われらの まなこをむかへ
照る日は ひかり直さし
われらの ことばにうつる

(2) 緑吹く 樟の葉風に
時の鐘 継ぎて響けば
人の世に まこと立つべく
現身に まこと立つべく
たまきはる 命をこめて
いしずえ 堅く築かん
伸びゆく 強き力の
日出づる 国の子我等



初代総長 木下廣次先生の揮毫

水梨 彌久 作詞

下総 皖一 作曲

$\text{♩} = 138\text{位}$
軽快に

mf やや荘重に

(一) コ コ ノ エ ニ ハク
(二) み ど り ふ く

f

ナ ゾ ニ ホ ヘル セ ン ネ ン ノ ミ ヤ コ ニ ア リ
す の は か ぜ に と き の か ね つ ぎ て ひ び け

mf *f*

テ ソ ノ ツ チ ラ ア シ タ フー ミ シ メ ソ ノ ソ ラ ヲ ユ
ば ひ と の よ に ま こ と た つ べ く う つ せ み に ま

mp 快活に

ウ ベ ア ヲ ゲ バク ア オ グ モ ハ キ ワー ミ ハ
こ と た つ べ く た ま き は る い の ー ち を

mf

ル カ ニ ワ レ ラ ノ マ ナ コ ヲ ム カ ヘ テー ル ヒ ハ ヒ カ リ タ ダ サ
こ め て い し ず え か た く き づ か ん の ー び ゆ く つ よ き ち か ら

f *ff*

シ の ワ レ ラ ノ コ ト バ ニ ウ ツ ル ー
ひ い づ る く に の こ わ れ ら ー

学歌は、昭和15年（1940年）1月18日、告示第1号によって制定されたものである。

その歌詞は、前年の5月から11月にかけて学内で公募されたもので、その応募作品から1等選ばれた昭和13年本学文学部国語国文学専攻卒業生の水梨彌久の作品である。

また、作曲は、当時、東京音楽学校の助教授であった下総皖一に依頼したものである。

—「京都大学70年史」による—

2 学 生 歌

長崎 太郎 作詞

芥川 徹 作曲

Tempo di Marcia

(♩ = 114)

ヒカ リア フル ル ーア オーゾラ ニ ムゲ

シノ ト キ ラ キ ザ ミ ツ ツ ユ

キ ー テ カ エ ラ ー ヌ セ イ シュン ノ ー ト

オ ト キ イ ノ ー チ ハ グ ー ク ミ テ マ コ

ト ノ ミ チ ニ ハ ゲ ー マ シ ム ワ レ

ラ ノ ホ コ ー リ ガ ク ー ノ ト オ

- | | | |
|-----------------------------|-------------------------|--------------------------|
| (1) 光溢るる蒼空に
尊き命育みて | 無限の時を刻みつつ
真理の途に励ましむ | 逝きて帰らぬ青春の
吾等の誇学の塔 |
| (2) 嗚呼ここにしも東西の
八つの灯火掲げつつ | 思想の潮渦巻きて
学徒吾等の抱りて立つ | 荒るる怒濤の地を打てど
岩根は固し学の塔 |
| (3) 楠の大木に風薫り
自由独立自治を求め | 萌ゆる若葉に陽は映えて
吉田山辺に学舎を | 今日廻り来ぬ記念の日
創めし大人を偲ぶかな |
| (4) 嵐雄叫ぶ唯中に
国敗るとも外国に | 学の自由を譲りてし
学の誉を弥高く | 不拔の信念君知るや
挙げし功を思わずや |
| (5) 朝靄曳きて黙深き
比叡の大嶺を背にし | 巷を覚ます時の声
光を高く掲ぐる | 闇に暮れゆく都路に
吾が学塔に榮あれ |

(昭和28年6月18日学生歌公募入選作)

3 応 援 歌

中川 裕朗 作詞

多田 武彦 作曲

しんせい の いぶ きにみち て いぶ きにみち て

やくどう の わか きかいなに しょう りわかたん

まも れ まも れ まも れ ぼこ う の

えーいーよー きょうーーと だい が

く きょう と だ い が く

(1) 新生の 息吹きに充ちて 息吹きに充ちて

躍動の 若き腕に 勝利分たん

守れ 守れ 守れ 母校の栄誉

京都大学 京都大学

(2) 麗しき 吉田の里に 吉田の里に

幾星霜 鍛えし力 ここに尽さん

示せ 示せ 示せ 母校の伝統

京都大学 京都大学

(3) 公明の 日輪のもと 日輪のもと

高鳴るは 希望の凱歌 自由の潮

たたえよ たたえよ たたえよ 不滅の光

京都大学 京都大学

(昭和33年制定)

4 逍 遥 の 歌

沢村胡夷 作詞作曲

- | | | |
|---|---|--|
| (1) 紅萌ゆる岡の花
早緑 <small>さみどり</small> 匂う岸の色
都の花に <small>うそぶ</small> 囁けば
月こそかかれ吉田山 | (2) 緑の夏の芝露に
残れる星を仰ぐ時
希望は高く溢れつつ
我等が胸に湧きかえる | (3) 千載 <small>せんざい</small> 秋の水清く
銀漢空にさゆる時
通へる夢は <small>こんろん</small> 昆崙の
高嶺 <small>たかね</small> の比方 <small>かなた</small> ゴビの原 |
| (4) ラインの城やアルペンの
谷間の氷雨なだれ雪
夕はたどる北溟 <small>めい</small> の
日の影暗き冬の波 | (5) 嗚呼 <small>あ</small> 故里よ野よ花よ
ここにも萌ゆる六百の
光も胸に春の戸に
囁き見ずや古都の月 | (6) それ京洛 <small>けいらく</small> の岸に散る
三年の秋の初紅葉
それ京洛の山に咲く
三年の春の花嵐 |
| (7) 左手の文にうなづきつ
夕の風 <small>ゆうべ</small> に吟 <small>ぎん</small> ずれば
砕けて飛べる白雲の
空には高し如意ヶ嶽 | (8) 神楽ヶ岡の初時雨 <small>しぐれ</small>
老樹の梢伝う時
檠灯 <small>けいとう</small> かかげ口桶む
先哲 <small>せんてつ</small> 至理 <small>しり</small> の教にも | (9) 嗚呼 <small>あ</small> 又遠き二千年
血潮 <small>ふみ</small> の史や西の子の
栄枯の跡を思うにも
胸こそ躍れ若き身に |
| (10) 希望は照れり東海の
み富士の裾の山桜
歴史を誇る二千載
神武の児等が立てる今 | (11) 見よ洛陽の花霞
桜 <small>もと</small> の下の子等が
今逍遥に月白く
静かに照れり吉田山 | |



紅もゆる歌碑